

不增不減經の如來藏說

高 崎 直 道

『不增不減經』は「如來法身と衆生界とは一界であつて増減なし」ということを主題とする短い經典で、現在、菩提流支による漢訳⁽¹⁾のみ存し、サンスクリット原本もチベット訳も伝えられていない。資料としては漢訳の他に、『寶性論』所引のサンスクリット断片があつて、經名および、本文の約三分の一に及ぶ部分の原文が知られ、また、『大乘法界無差別論』等にも二三引用がある。『寶性論』によれば、經題を

Anūnatvāpūrṇatvanirdeśa-[parivarta] (不可減少性と不可充足性の証示[品])

といふ。「品」と云う以上、大部の經典の一品を形成している。この經がいわゆる如來藏系經典群に属し、しかも、その教理形成に重要な役を演じていることは、『寶性論』における引用状況からも判断せられる。同時に經自身にとつても、如來藏說は單なる部分的言及というにとどまらず、その全体が如來藏說の解明を目的としているといえる。これらの諸点について既に學界周知の事であるが、なお細部にわたつての十分な論及はなされていないと思われる。そこで、經の構造を分析しながら、その如來藏說と、如來藏說展開過程における次の引用の際は「品」の名を欠いている。そして、回論の漢の意義とを検討してみたいと思う。

『不增不減經』は「不増不減經」でとおし、漢訳の經自身、小部なりとはいへ、序・正宗・流通の三分を完備した独立の經典であるので、これが恐らく原型であろう。たとい何れかの集成に編入されていたとしても、現存の資料からは知るよしもなく、單經として扱つて差支えないものである。單經としては sutra ふらわず、nirdeśa とのみよばれていたものと考えられる。⁽⁴⁾

『不增不減經』は「如來法身と衆生界とは一界であつて増減なし」ということを主題とする短い經典で、現在、菩提流支による漢訳⁽¹⁾のみ存し、サンスクリット原本もチベット訳も伝えられていない。資料としては漢訳の他に、『寶性論』所

引のサンスクリット断片があつて、經名および、本文の約三分の一に及ぶ部分の原文が知られ、また、『大乘法界無差別論』等にも二三引用がある。『寶性論』によれば、經題を

Anūnatvāpūrṇatvanirdeśa-[parivarta]

(不可減少性と不可

充足性の証示[品])

といふ。「品」と云う以上、大部の經典の一品を形成している。この經がいわゆる如來藏系經典群に属し、しかも、その教理形成に重要な役を演じていることは、『寶性論』における引用状況からも判断せられる。同時に經自身にとつても、如來藏說は單なる部分的言及というにとどまらず、その全体が如來藏說の解明を目的としているといえる。これらの諸点について既に學界周知の事であるが、なお細部にわたつての十分な論及はなされていないと思われる。そこで、經の構造を分析しながら、その如來藏說と、如來藏說展開過程における次の引用の際は「品」の名を欠いている。そして、回論の漢の意義とを検討してみたいと思う。

二

經の正宗分は舍利弗の、無始時來三界六道に輪廻する衆生聚、衆生海に増減ありや否や、との質問ではじまる。世尊は、まず、この増減見は大邪見であり、この大邪見の故に衆生は生死往来するのだと答え、さらに、衆生は「一法界を如実に知らず、見ざる故に」衆生界増・衆生界減という邪見心を起すのである、と説明する。

然らば、A、邪見とされる増減見とはなにか。B、如何にみることが正見であるか。これが以下の主要部分の内容である。

A、邪見——増減見

(1) 何故に、衆生は増減の見を抱くのか。「如來滅後五百歳をすぎ」沙門にも非ず、仏弟子にもあらざる人々が、自ら沙門仏弟子と称しつつ、増減見を抱いているが、その理由は

- 1 依如來不_了義經、無慧眼故
- 2 遠離如實空見故
- 3 不如實知如來所証初發心故
- 4 不如實知修習無量菩提功德故
- 5 不如實知如來所得無量法故
- 6 不如實知如來無量力故
- 7 不如實知如來無量境界故

不_信如來無量行、處故
不如實知如來不思議無量法、自在故
10 不如實知如來不思議無量法、自在故
11 不能如實分別如來無量差別境界故
12 不能善入如來不可思議大悲故
13 不如實知如來大涅槃故

である。經はこれらを列举するのみであるが、その内容を推定してみると、次の如くなるであろう。

まず、1と2は一般的理由で、如實空見を説く了義經、すなわち大乗經典を知らず、小乗の不_了義經によることの非である。3以下は、その大乗經典に説かれる如來の特質について知らず、信ぜざることの非である。ここに挙げられる一一の項目は初發心から大涅槃へという順序で、如來の大智・大悲を示している。すなわち、3初發心と、4福智二資糧の積集。その結果としての5無量仏功德(仏法 *Buddhadharma)と6力(*bala)の具備(すなわち十力・四無所畏・十八不共法等)。この仏功德と力を具備した如來の7境界(*visaya)すなわち智の対象と、8行処(*gocara)すなわち悲心の活動領域の無限性。その活動における自在性(*dharmaisvarya)と10方便と、11顯現の種々相。総じてその基本にある12大悲。そして、13涅槃の真意義である。ここにいう「如來」とは、たとえば『華嚴經性起品』でいうような如來、すなわち、

後に「報身、化身をも含め、その所依たるよくな「法身」であり、上述の一の項はその「如來の出現」すなわち法身の顯現の諸相であると解することができるよう。これはBに説かれる法身の定義とも関連するが、特に最後の大涅槃を如実に知らないことが、直接には増減見の内容の中核をなしていると思われる。

(2) こひに減見とは、断・滅・無涅槃の二見で、それぞれ畢竟盡・滅即涅槃・涅槃畢竟空寂とみるもの、いわば消極的涅槃觀をいう。これはまた無欲見と畢竟無涅槃見の二を生じ、前者はさらに二種、後者は六種の邪見に分けられる。

他方、増見とは涅槃始生見と無因縁忽然而有の見で、これは縁起法をみとめないことを意味する。

この増減の一見は内外・龜細の種種見の根本となる極悪大患の法であるが、しかもこの一見は「一界に依止し、一界に同じ、一界に合する」ものといわれる。次下の文の意味するところから解すれば、これは「一見が虚妄であり眞實有ではない」とをやすと思われる。「一切の凡夫さんの一界を如実に知らぬ、見ゆる故に」邪見を生ずるやうな (bālānām ekasyadhator yathābhūtām ajñānād adarśānāc ca pravartate)。⁽²⁾

B、正見——如實知見一界

然らば如實に知り、見ゆるやうに一界 (ekadhātu) 云々何であるか。

(1) こひの一界とくべつ甚深義が、如來智慧境界 (tathāgatavīśaya) 如來心所行處 (tathāgatagocara) であつて、一切趣聞緣覺の智をもつてしか知らんが出来ず、ただ仰顎かべらむの (śraddhāgamaniya) であり、第一義諦 (paramārtha)、衆生界 (sattvadhātu)、如來藏 (tathāgatagarbha)、法身 (dharma-kāya) と同義語である。⁽³⁾

(2) こひ「法身」とは
1 仏の無量不可思議なる諸德性 (仏徳 buddhadharma) と不
分離性のもの (不離 avinirbhāgadharman)、類似解めさせな
えないもの (不脫 [智] avinirmuktajñānaguṇa) である。⁽⁴⁾

2 不生不滅の法であつ、過去・未來の一辯際を遠離してい
る。

3 常 (nitya) 恒 (dhruva) 神涼 (śiva) 不變 (śāśvata) もあ
る。⁽⁵⁾

4 そのあり方に応じて、衆生〔界〕 (sattvadhātu)、菩薩 (bodhisattva)、如來 (tathāgata) 云々ぐわるね。すなわ
ち衆生界とは法身が無辯際の煩惱に纏われた (aparyantakles
śakaśakotigūḍha) 痛楚をくじ、したがつて法身と衆生界は義
1名異である。⁽⁶⁾

以上の法身の定義 (なんぢ(1)の甚深義の説明) は『中性論』に引用があり (2)の2を除く全文)、また『勝鬘經』にも内容的に一致する説明を見出しつゝ重要なもの、また、4の三分

説は『如來藏經』の第六喻の項下に「⁽¹⁾」と「衆生」との区分に基づくと思われるが、その意義や他經論との関連は後節であらためて検討する。

(3)この法身と義一名異なる衆生界は、その独自の構造、すなわち無邊煩惱所縲という状態からみて、次の三種の特性をもつていて。

1 如來藏は清淨法 (*subhadharma*) も無始時來共存しかかも本質的に結合している (*anādisāmnidhya-saṃbaddhasvabhāva*)。 (如來藏本際相應体及清淨法)

2 如來藏は不清淨法なる煩惱の覆い (*kleśakośa*) も無始時來共存しているが、本質的には結合していない (*anādisāmnidhyasam̄baddhasvabhāva*)。 (如來藏本際不相應体及煩惱縲不清淨法)

3 如來藏には未來永劫にわたつゝ (*aparāntakotisama*) 常恒なる法性 (*dhruvadharma*) が存在しつづける (*samvidya-māna*)。 (如來藏未來際平等法及有法)

この三點はその意味が経自体によつて続けて敷衍解説され

てゐるが、要点をいえば、第一によつて「自性清淨心」、第二によつて「為客塵煩惱所染自性清淨心」、第三によつて「衆生界」が説かれる、といふのである。すなわち、第一と第一とは、自性清淨心客塵煩惱染といふことの理論的説明、第三は第一、第一の定義から導かれる結論として、如來藏が法

身と同様、「界」 (*dhātu*) であること、それによって「衆生界」の名が与えられるといふことである。そして、この三點の何れをとっても、衆生界は真如と不異である（真実如不異不差 * *tathatāvyatibheda*）、といふのが経の主題である。これは如來藏すなわち衆生界の定義として、如來藏説の歴史の上で極めて重要な地位を占めるものと考えられる。

ところで、漢訳のこの箇所を、上述のようにまとめるについては、かなり詳細な説明を要すると思われる。上の解説は、三點に関する『宝性論』の句に基いて導き出したものであるが、その理由はあとで、如來藏説の解説と併行して、明らかにするつもりである。

(3) 最後に、経は、この真如と無差別なる法において、増減の一邪見を起すものは仏弟子ではなく、冥より出でて大冥に入り、闇より出でて大闇に入るものである故に、この経の説く法を学んで、一見をはなれて正見に住すべきである、と説いて結びとする。

II

以上の概要から知られるように、この経の主題は一貫して「衆生界」である。そこで、この「衆生界」に関する説明を分類してみると、次の如くなる。

(1) 衆生界 = 衆生聚 (* *sattvarāśi*)、衆生海

(2) a 衆生〔界〕 = 過於恒沙無辺煩惱所纏〔法身〕——從無始來隨順世間、波浪漂流生死往来

b 衆生界（如來藏）の三特質（前節参照）——為客塵煩惱所染自性清淨心

(3) a 衆生界 = 如來藏 = 法身 = 一界（一法界）

b 衆生〔界〕 = 不生不滅、常恒清涼不變歸依、不可思議清淨法界

(右のうち、(2)a の衆生界の「界」の字は『宝性論』所引の文章によつて補う。(3)b の界は文証はないが、界の意義から判じて、ここには必要と思われる。理由後説。なお、これは(2)の三特質の解説の最後にある説明)

「衆生界」(sattvadhatu) といふ語は仏教特有の用語で、しかもパーリ仏典に対応する語の見あたらないものであるが、大乗仏典一般の用法としては、衆生一般に対する集合名詞であり、内容的には(1)の用例にみられるような衆生聚と同じである。⁽²⁰⁾ その意味で単に「衆生」と訳しても差支えない。そして、この衆生界は、(2)a の用例にみられるように、菩薩・如來と異なる、迷える衆生、生死往来する衆生である。

ところで『不増不減経』は、この衆生界を「法身」の一つのあり方として、無邊煩惱所纏の法身と規定した。この法身との関係を証明することが、この経の目的とするところなのであるが、そのため、衆生界の構造を、如來藏の語を用い

て三つの面から分析する。したがつて、(2)の用例での意義は衆生聚と同時に、如來藏の同義語、内容的には客塵煩惱所染の自性清淨心をもさすことになる。何故に衆生界が如來藏の同義語として用いられるかについては、二つの面が考えられる。第一は如來藏という語の、先行經典における用例、第二は界という語のもつ意味である。第一について想起されるのは、如來藏の語の最初の使用例と目される『如來藏經』における、「一切衆生は如來藏を有するものなり」(sarvasattva, tathāgatagarbhāḥ) という文である。如來藏の原意は「如來の胎」とも「如來の胎兒」とも解せられる依主釈の合成語であるが、この文はそれを有財釈として用いたもの、したがつて、衆生の一人一人は「有如來藏者」といういみで、端的に「如來藏」とよんでも差支えないものである。そして「一切衆生」を集合名詞たる「衆生界」の語におきかえれば、衆生界 = 如來藏ということが、単数で示されるであろう。(2)d の衆生あるいは衆生界はこの用法と解しうる。いいかえれば、『不増不減経』の「衆生界」は、『如來藏經』の「如來藏」の有財釈的用法を置きかえたものに他ならない。

ところで、『如來藏經』には、「衆生」および「衆生界」に関する、次の如き用法がみられる。それは前節で、法身の定義⁴、の恐らく典拠となつたであろうと推定しておいた箇所で、まず、「衆生」については、

「*hūnid*、食鹽癡・過愛・無明の煩惱の纏いの中に胎児となれ
る (*sñin-por gyur-pa* = *garbhagata) 如來の法性 (*chos-nid* =
*dharmatā)、ルが衆生 (*sens-can* = *sattva) となリけられ
る」

とある。この文中、「胎児となれる如來の法性」ルは、『如來藏經』の他の用例でいえば、如來身、如來智のことル、到らざることルなき如來智が、煩惱所纏の衆生の身中にも滲透していることをさす。それを直ちに「衆生」とよぶとすれば、衆生がすなわち「胎児」であるといふことになる。これは、さきの命題「一切衆生有如來藏」を「一切衆生は如來の胎児とある」と訳すこと（有財釈としてではなく）を可能ならしめる用例である。同時にこの「衆生」は「如來の法性」すなわち如來の本質、本性をいうに他ならないことになるから一般にいうのとは少し違つた意味になる。唐訳がここを「有性」と訳したのは、*sattva* を *sat-tva* (有たること) というサンスクリットとしては原義に近く解釈したものル、それがここの意味かも知れない。25 あるいは *sattva* のもう両義を巧みに利用して、この立言となつたのであろうか。しかし、*sattva*、あるルは「衆生」をこのように使用する例は、他の経論においては見当ららず、少くとも、それが術語となつた形迹はない。

他方、「衆生界」については、前掲の文に続いて、

「*hūnid*、清涼となるル、それが涅槃アハ、無明煩惱の纏いを浄化したために、衆生界 (*sens-can-gyi khams*) のうねル、大智の聚り (*ye-ses chen-pohi tshogs*) となリたものが、それを獲得するのアハ」

とあり、更に、この「最勝の (dam-pa) 大智聚」が世間に現われて法をとく時如來と名づけられるところルに、その用例がみられる。この用例で見る限り、「衆生界」は普通にみられるような集合名詞的用法とみなす他はない。「大智の聚り」とは、丁度、法のつまりを「法身」というのと同じ意味で、如來をさすのであらう。然れば、『不増不減經』が(2)a でいうのと同義である。ただ「法身」のもつ性格26 が、逆に「衆生界」の意味を規定することになるのであるが、『如來藏經』はそこまで言及しない。それを果したのが『不増不減經』であり、そのためには「界」のもつ意義を利用することになつたものと思われる。同時にそこでは、『如來藏經』が、‘*sattva*’の語にもたせたような、本質、本性という意味が、かえつて、「衆生界」のうちで生かされぬルになつて、‘*sattva*’は単に「衆生」の意味にもどつてしまつたのアハなからうか。

の主題が証明されてゐるものと考えられる。そこで次に、三種の特質の検討について述べる。

四

さて、衆生界の構造を示す三特質に関する箇所の漢訳は、かなり難解であり、時に誤訳もあるのではないかと思われる。ここでは、前節でのべたように、『宝性論』の利用例を手がかりとして検討した上で、最後に、その全文の読みを考えてみようと思う。

『宝性論』の利用する文といふのは、回諭で、いわゆる如來藏十義（『仮性論』の二つ弁相品中の十相）の解説のあと、九喻の説明に入る直前で、そのつながりとして述べられてゐるのである。すなわち、

『宝性論』の利用する文といふのは、回諭で、いわゆる如來藏十義（『仮性論』の二つ弁相品中の十相）の解説のあと、九喻の説明に入る直前で、そのつながりとして述べられてゐるのである。すなわち、

以上、未來際と等しく常恒なる法性が存在してゐる（*aparāntakotisama-dhruvadharma-tā-saṃvidyamānata*）に関する、「無始時來の共存性」と、差異点としての「結合性」（*sambaddha-svabhāva*）と「非結合性」（*casambaddha-s*）である。漢訳は後の点を「相應体」「不相應体」と訳している。この共存とか結合・非結合といふのは、如來藏と清淨法ないしは煩惱藏との関係をいうのであるが、『宝性論』においては、清淨法や煩惱藏を主語として立てるので、結合すなわち相應が清淨法の形容詞となり、非結合すなわち不相應が煩惱藏の形容詞となつてゐる。それに対し、『不增不減經』は如來藏を主語として、清淨法と相應し、煩惱纏すなわち不清淨法と相應しない、と述べてゐるものと解せられる。しかばば清淨法とは何か。それを検討するために、しばらく類似の表現を他の論書から探してみよう。

『宝性論』の利用の仕方は、恐らく『不增不減經』の原文の通りではないであろうが、趣旨において相違はない。そのうち、後の二項が、『不增不減經』の二つ特質中の第一、第二で、それによつて『如來藏經』の九喻に示されるような如來藏の構造的特質が把握されている。『不增不減經』に対する理論的解説、すなわち如來藏=為客塵煩惱所染自性清淨心の解説にあつたこと、前節にふれたとおりである。

ここで先づ注目すべきことは、衆生界の三特質中、第一と

第二の文における叙述の対比関係、すなわち共通点としての「無始時來の共存性」と、差異点としての「結合性」（*sambaddha-svabhāva*）と「非結合性」（*casambaddha-s*）である。

漢訳は後の点を「相應体」「不相應体」と訳してゐる。この

共存とか結合・非結合といふのは、如來藏と清淨法ないしは煩惱藏との関係をいうのであるが、『宝性論』においては、清淨法や煩惱藏を主語として立てるので、結合すなわち相應が清淨法の形容詞となり、非結合すなわち不相應が煩惱藏の形容詞となつてゐる。それに対し、『不增不減經』は如來藏を主語として、清淨法と相應し、煩惱纏すなわち不清淨法と相應しない、と述べてゐるものと解せられる。しかばば清淨法とは何か。それを検討するために、しばらく類似の表現を他の論書から探してみよう。

先づ、『仏性論』が、『如來藏經』の九譬の明かすところの仏性の五義として挙げるものが注目される（弁相分第四の第九無變異の項下⁽³³⁾）。すなわち、その第四、第五に、

四、有無初不應相應殼

五、無初相應善法為性

とあるのは、『宝性論』との対比において、明らかに上掲の説を承けたものと解せられる。（第一から第三は、三種の信、すなわち、『宝性論』のいう實有、可得、有功德という如來藏の本質的構造を示すもので、これは、上掲の『宝性論』でいえば第一、『不增不減經』でいえば第三の規定に代る説明と思われる。）不相應と相應がここでは殼（kośa）と善法として対比されている。不應相應という表現は、それにつづく釈によれば「不應」とは煩惱業報が法身と違逆している意、「相應」⁽³⁴⁾とは、しかも法身によりてこの三法を起す故と説明されているので、この「相應」は『仏性論』が新たに加えた解釈と思われる。

『仏性論』はこの同じ対應を、いわゆる如來藏の五藏義中の第五、「自性清淨藏」の説明にも用いている。⁽³⁵⁾

「若一切法隨順此性、則名為内、是正非邪、則為清淨。若諸法違逆此理、則名為外、是邪非正、明為染濁故言自性清淨藏。」

さらに、同じ五藏義としてこれと関連のある文を、真諦訳の『撰大乘論世親釈』に求めると、次の如くある。

(1) (卷一) — 「界」の五義中、第五藏⁽³⁷⁾義。

「若應此法、自性善故、成內。若外此法、雖復相應、則成殼。」

(2) (卷十五) 法界の五義中、第五甚深義⁽³⁸⁾。

「若與此相應、自性成淨善故。若外不相應、自性成殼故。」

第一例の「雖復相應」は恐らく、『宝性論』のいう「無始時來共存」の事実をさすものであろう。以上の諸例を綜合すると、「相應」するには、自性清淨心、如來藏、界、法界等とよばれるものと本質的に結びついて、あるいはそれに隨順してその内なる性質を形成しているもの、淨善なる一切法をさしていることがわかる。決して、如來藏や自性清淨心それ自体をさして清淨法といつているのではない。同様に、「不相應」なるものは如來藏等の外にあり、これと違逆する煩惱をさすのであって、如來藏が不清淨法であるのではない。

このことはさらに、『不增不減經』自体の説明にみられる別の対應を示す文章をみると、より判然とする。すなわち、

(一) 「此法 (=如來藏) 如實・不虛妄・不離・不脫智慧・清淨・真如法界・不思議法。無始本際來、有此清淨相應法體。」

(二) 「此本際來離・脫・不相應煩惱 (所) 纏不清淨法・唯有如來菩提智之所能斷。」

における、「不離・不脫智慧」と「離・脱」の対應である。

このうち「不離・不脫智慧」という形容句は、さきにみたように『不增不減經』自体が、法身の定義の第一に用いてい

る用語である。そこで意味は、『属性論』所引のサンスクリット文が明らかにすらぶらび、法身が、*abhinirbhāgadharman*（不可分離性のもの）、*airnirmuktajñānaguna*（知も離れぬ徳性をもつ）とこうひとである。そして、具体的に「不離」とは、恒河の沙数をこえる不可思議なる仏の徳性と不可分離であることを意味する。この不可分離性は、燈や摩尼珠の実例が示してくるように、いわば、実体と属性との関係である。ただ、燈などの実例においては、「不脱」(*avinirmuktaguna*) は「不離」とほぼ同義であるのに、法身の場合に

(2) 「世尊よ、如来蔵は分離せる（vinirbhāga）、智と離れたる（muktajñā）」やぐての煩惱蔵（klesakośa）を欠いている（śūnya 空）。世尊よ、如来蔵は、恒沙の沙数を超えたる、不可分離にして、智を離れざる（amuktajñā）不可思議なる仏徳を欠いていなし（aśūnya 不空、かなわち具備してしる）。

(3) 「それ故に、世尊よ、如来蔵は、相応する（saṃbaddha）不可分離にして、智と離れざる、諸々の無為法の所依・支柱・基盤である。世尊よ、不相應なる（asambaddha）分離性にして、智と離れたる有為法にとつてもまた、如來蔵は所依・支柱・基盤である。」⁽⁴⁾

のみ、「智」という言葉が挿入されているのは、法身が智と不相離であると共に（そのいみでは、やきの句は「智なる徳と不脱」と訳すことも可能）、不可思議なる仏の徳性（不思議仏法）と智との不相離性、すなわち、如來智をはなれて仏功德の成就もない、という不可分離性をも意味しているようである。ところは、この *avijnirmuktajñāna* なる言葉が、『勝鬘經』においては、*amutajñāna*, *amuktajñā* という略形であらわれ、しかもそれが、過於恒沙なる不思議仏法の修飾語として使用されているからである。すなわち、⁽³³⁾

このうち、(1)は『不増不減經』の法身の定義を直接うけるもの、ただし、不離・不脱智等の句がすべて仏徳の修飾語とされている。そして、具備というのが「相應」の意味に他ならない。(2)はいわゆる如來藏の空不空義であり、不空というのが「相應」に、空が「不相應」にあたる。(3)では明瞭に「相應」と「不相應」が「不離・不脱智」と「離・脱智」と並んで、それぞれ無為法・有為法の修飾語とされている。以上を総合すれば、

(1) 「苦滅諦」の名によれば、世間の念数を超えた不可分離なる (avirbhāga)、題の離れたもの (anuktajñāna) 不可思議なる仏徳 (buddharma) を具備する (samavāgata) 法身が示せねばならぬ。」

清淨法	<i>subhadharma</i>	不清淨法	* <i>asubhadharma</i>
仏法 (過於圓熟, 不顯譴)	<i>buddhadharma</i> (pl.)	煩惱藏 (纏, 誓)	<i>kleśa-kosā</i>
無為法	<i>asamkṛtadharma</i>	有為法	<i>samkṛtadharma</i>
善法, 正		邪	

相応 samucchaya	不相応 asaṁucchaya
不離 avinirbhāga	離 vinirbhāga
不脱智(不起) avinirmukta-	脱智(脱) *vinirmukta-
jñāna, amuktajñāna,	jñāna, muktajñāna,
amuktajñāna,	muktajñāna
不對 aśūnya	對 śūnya
具備 samanvāgama	
内、隨順	外、違逆

これら一連の対比が見出される。この対比は、『勝鬘經』『涅槃論』、そして真諦訳の諸本へひりつけられて展開した説として、印度の如来藏説の歴史における、いわば正統の伝承であるといえる。そして、その起原をなすものが、『不増不減經』の説く、衆生界の構造に関する三特質中の最初の一一つにあつたと考えられるのである。

さて、上述のような相應の清浄法、すなわち仏の徳性と、不相應の不清淨法、すなわち煩惱の纏いが、ともに、無始時來共存している、というのが、如来藏の構造なのであるが、『不増不減經』は、第一、すなわち、清浄法との相應を理由に、如來藏を「自性清淨心」とよび、第二の、煩惱纏との不相應を理由に、この自性清淨心が客塵によつて染せられていふのだと、説いてゐる。事実は、「自性清淨心・客塵煩惱染」といふことばが古くから存在し、それに對し、『如來藏經』

が、その構造を譬喩をもつて説明した上で、自性清淨心とよばれたものに、新たに「如來藏」の名を与えた。それをうけて、この經が、その構造を理論的に、煩惱所纏、煩惱所染とは「無始時來共存しつゝ、しかも不相應」の意、と解説したものである。同時に、經の意図としては、清淨なる仏の徳性と相應してゐることを理由に、如來藏が、仏の徳性と不可分離であり、智と不離であるところの法身、法界に他ならないこと、すなわち、如來藏 = 法身 = 一界ということを証明しようとしているものと考えられる。そして、特にこのことをいうために、如來藏の代りに、衆生界という語をもつてきたりのと推測される。それを示すのが、特質の第三である。

第三の特質は、さきに、「如來藏は未來永劫にわたつて常恒の法性を有する」と解したものである。それについて、経は、この如來藏が、一切諸法の根本であり、一切法を具備し、世法中にあつても、なお、眞実の一切法と不離不脱であり、一切法を住持し、攝すると説明している。このうち、一切法の具備と、一切法と不離・不脱であるという点は、それが眞実の、すなわち清淨なる仏法（仏の徳性）を意味するかぎりにおいては、さきの第一の特質のいうところと同一である。そして、それは法身の性格でもあるから、法身に与えられた他の定義、すなわち、不生不滅の法であることと、常・恒・清涼・不变の帰依處であることが、直ちに如來藏にも与えら

れ、それを「常恒の法性あり」と表現したものとみなすことが出来る。それにもかかわらず、なお、それに加えて、一切法の根本、一切法を住持し、摂するといつては、ひとえに、清淨真如法界とか、不可思議法界、不可思議清淨法界等といわれている「法界」の意味するところにかかわってくると思われる。

「法界」(dharma-dhātu) は、それだけで単独の研究対象となるような、重要な、そして、今日なおその意味に関して未整理な用語であるが、大乗仏教における一般的用法としては、(1)法の全領域、すなわち「一切法」というと殆ど同義の用法と、(2)法出生の因、(dhātu = hetu) すなわち、一切法の根源、ないしは本質という用法とがある。前者は、ちょうど、衆生界が一切衆生を意味する集合名詞であるのと同様の、dhātu の用法である。dhātu の語義・用法としては、この集合名詞を示す用法は後の発展で、古くは、要素、元素という意味であるらしい。⁽⁴⁵⁾ これは、アビダルマ仏教でいう十八界の一としての「法界」の意味するところ、すなわち、種族(gotra) 生本(ākara) の義に相当する。右の(2)の意味はこれに近い。ただし、アビダルマにおいては、法界とは、「法なる界」であり、意の所縁となる法をさす(=法處)。そして、意の所縁となる法とは、直接には十八界の一つであるが、前五識の所縁はすべて、間接的に意識の対象である故に、一切

法がその中に含まれるものとして、(1)の用法に帰してしまふ。大乗仏教でいう「法界」は、恐らく、ここを出発点としているのではないかと思う。同時にその用例は、殆ど(2)の意義と区別しがたい、というより、後の論書が与える解釈はすべて、(2)の意義によつている。⁽⁴⁶⁾ ここでの用法もまた、それを示しているのであって、「法界」とは一切法であると共に、一切法の根本、依持、それを包摂するものである。そして、このような「界」の意義を「衆生界」に対しても与えようとするのが、経の意図に他ならない。さきに、経の本文のいう「衆生」が、その原語は sattva-dhātu であつたろうと推定した所以である。さらに、「界」のむつ二様の意義を利用して、一語にして法界と全同の内容を含ませるべく、如來藏の語にかえて、衆生界の語を用いたものであろう。それは、同時に、「如來藏」を衆生と等置される意味(有如來藏者)よりも、衆生に内在する本質という意味に純化させることにもなつた。⁽⁴⁷⁾ 換言すれば、「garbha」という語の譬喩的に表現している意味を、「dhātu」という抽象的理論的表現によつて示す道をひらいたのである。⁽⁴⁸⁾

ところで、如來藏を dhātu と規定する時、そこから展開する道は二つある。一つは、この経が既に示しておる如來藏と同義とみるもので、そこから、一切法出生の因という場合の、一切法を有為法無為法を含むものと解釈するもので

ある。この解釈が、やれに挙げた『勝鬘經』の第11例にみられる「無為法ならびに有為法の依持・支柱・基盤」という説明となり、われには、如來藏を輪廻の所依とみる考え方につながる。それを端的に表明したものとして、われわれは、

『大乘阿毘達磨經』の偈と云ふ。

「界は無始時來のる、一切諸法の等しく所依とする。」これがわが、一切の〔輪廻の〕趣もあり、おた、涅槃の獲得ある

る」

を見出すのである。⁽⁵⁾

他方、法界を、いわばその体現者としての如來の「法身」を表現する時、如來藏=界は、果たる法身を出生するより前の因として、おつ、如來法身と共通する本質、すなわち、法性(dharmatā)と同義となる。(漢訳の「性」は dhatu のみ)この意味を表ねむのは極めてややねらう。これは如來藏が元來意味するよりは、より忠実である。このかく、「如來性」(ta-thāgatadhatu)⁽⁵⁾「法性」(buddhadhatu) という術語が生れるのであるが、この最初の使用者は疑ひて『涅槃經』であったと考えられる。⁽⁵⁾

以上『不增不減經』の如來藏説ならびにその意義について、ほほ明らかになしえたと考へるのであるが、最後に、この經の主旨を明快にまとめておきたい。『法性經』の11頌を掲げておきたい。このうち第1頌は直接には『勝鬘經』

によると、第一頌は『観自在嚴讖』(v. 21)その他に類似の頌の見出せらるのド。『法性經』の創作たるやに多少疑惑のあたるところのド⁽⁵⁾。今も聞ねなら。

nāpaneyam atah kimcid upaneyam na kincana /
darśitavyam bhūtato bhūtām bhūtaradarsí vimucyate//
śūnya āgantukair dhātuḥ savinirbhāgalakṣaṇaiḥ /
aśūnyo 'nuttarair dharmair avinirbhāgalakṣaṇaiḥ//

(I, 154, 155)

(凡)から減やぐれ何のめたく、増やぐれ何のめたく。眞実をありのまことに見るべきである。眞実を見るのみは解脱する。性は分離を特質とする客觀に闇しては居たり、不可分離を特質とする無上法に闇しては不得やある。)

1 『仏說不增不減經』大正 No. 669 (16, p. 466—468)

2 [註]1) と金句用文と漢訳との对照表を掲げる。おた、宇井伯寿『法性論研究』pp. 319—325 参照。2ト、『法性經』にては、サンスクリット本 (Patna, 1950) (略称 RGV) の頁数を掲げる。おた、『不增不減經』の經文中の術語に加えたサハクリヤトは、『法性經』に典據のあらむ。*岳のあるのは推定である。

3 RGV. p. 2, l. 13; p. 3, l. 9.

4 'nirdeśa' を継名べらるのとは大乘經典中にかなり多い。たゞ此『維摩經』の原名は Vimalakīrti-nirdeśa である。『釋

『嚴經性起品』⁵を独立の經典として、Tathāgatotpattisam-bhava-nirdeśa（如來出現の說示）の名をもつて、‘nirdeśa, ‘uddesa’（半題の提起、本）に対する解答、解説（釈）の意味をもつた、『不增不減經』など、特定の主題に対する解説經と云う形式をもつてゐる。

6 如來藏説における經の地位については、勝又俊教『仏教における心識説の研究』（第二章、如來藏思想の発達）など参考。經自体については、『國語一切經經集部六』所収の解題ならびに和訳・註記等参照。ただし、和訳には改訂を要する箇所がかなりある。

6 大正14c, 466a.

7 回上、466b—467a.

8 B正見の項下で言及する、「如來智慧境界」「如來心所行處」これら対比参照の上。そのサンスクリット原文には智慧とか心、心の二つはなないが、内容をよく説明してあるとの解せらる。

9 『性起品』ながら、如來出現の意義については、西尾京雄「佛教經典成立史上における華嚴、如來性起經について」（谷大学研究年報、第一輯昭18）、拙稿「華嚴教學と如來藏思想」（『華嚴思想』、昭33、所収）等参照。

10 RGV. p. 13, ll. 11—12. 『性起論』⁶の文を第一章第九頌の註釈中で用ひるが、その内容は『般若經』に基づいて、且つことじふ。

11 大正16, 467a—467c

12 Cf. RGV. p. 2, ll. 8—14; p. 56, ll. 2—3
13 Cf. RGV. p. 3, ll. 4—5; p. 39, ll. 5—8 『大乘法界無差別論』大正35, 893b.

14 Cf. RGV, p. 40, ll. 16—p. 41, l. 5; p. 41, ll. 15—17. 『大乘法界無差別論』大正35, 893a.

15 Cf. RGV, p. 40, l. 16—p. 41, l. 5; p. 41, ll. 15—17. 『大乘法界無差別論』大正35, 893a.
16 『勝鬘經』との関係については、拙稿「如來藏思想における勝鬘經の地位」（『勝鬘經義疏論集』所収）参照。

17 大正16, 458c

18 RGV. p. 59, ll. 11~13 の全文は次節で引用する。

19 Cf. RGV. p. 18, ll. 3—4. 経の漢訳とは「心を一闡提の名づけ」であるが、『性起論』所引のものは「tamobhūyisthā (最大の闡ぶりなしの)」である、‘icchantika’の名はなし。なお、この「仮衆子に非ず」によって、闡提の「如來滅度後五重體」が々々も表意する。

20 F. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary, ‘dhātu’ の項で参照の上。ナリドヒ集の名前が用法のみに及んでおり、次下のべくもとの意義についてはなま。21 ‘garbhagata’ である點は『性起論』中も用例が一箇所ある。（RGV. p. 72, l. 11.: tatra ca sattve sattve tathāgata-dhātūr utpanno garbhagataḥ sanvidyate, na ca te sattvā buddhyanta iti,) これは回譯のチグヒト詔だ sñin-por gyur-pa と翻してある。なお、右の文は出典不明の引用である。

22 チグヒト詔からの詔。チキスヒトは仏教文化研究所編『漢藏』11

訳对照如來藏經」昭³⁴、を使用、(p. 60~61)。ただし、文中、
srid-pa (bhava) ふるたむじゆゑ、sred-pa (triṣṇā) ふゆめ
た。漢訳中、仏駄跋陀羅訳には該句「かく文なへ、單に「如來藏」
ふるたむ「不空訳」だ。

「彼欲眞癡無明煩惱藏中有如來藏性、以此名為有性。」

と、衆生に対し、特に「有性」(sat-tva) の訳を示してゐる。

23 『性性論』は「如來藏」の語義解釈にあたつて、その第1、
すなわち「法身遍滿の義」のふじゆ、「tathāgatasasyēme ga-
rbhāḥ sarvasattvāḥ」と説明する。(RGV. p.70, 1.17) 他の
二義からべば、『如來藏經』の文は、有財釈とみなればな
いが、そしてそれが後來の論書一般の解釈であるが、(『如來藏
經』のチグヒル訳も同様)、あらかじめ端的に衆生を如來藏、す
なわち「如來の胎児」とよぶのが、『如來藏經』における原
意であつたかも知れない。宇井博士の、右の『性性論』の文に
対する訳(『性性論研究』p. 582) 参照。

24 ‘dharmaṭā’は単に性質とか本性ふるひみ。如來智が如來
の本性じあむふるひみは、如來が智を本質とし、智を有つも
のであるふるひみ。あらかじめ、智を離れて如來はない。すな
わち、不離智の法身。

25 註33参照。sattva ふるひた embryo かなねむ胎児ふるひ
ふるひ。M. W. Sanskrit-English Dictionary, ‘sattva’ の
項参照。

26 例えば、註21で挙げた文ふる、sattva の中じあふ、「胎児
ふるひ」だ。‘dhātu’ ふるたむふるひ、あた、註23で挙げた語義
ふるひた」

不增不減經の如來藏說(龍 喪)

説明の直後で『性性論』が、やせつ經典の引用へ照われる文、
“na hi sa kaś cid sattvah sattvadhatu samvidyate yas
tathāgatadharmakāyād bahir ākāśadhātor iva rūpam” ふる
ぐれが、じじゆゑ、ふるひ「衆生」の意迷うふる。豊富な語
彙を有する『性性論』皿体にむ、それ以外の用法は見当たない。

27 原文は ‘~khams-kyi’。部分を示す属格と解釈した。

28 仏教文化研究所4 p. 62~3: de-bshin gségs-pa ji-lta-ba
mthon-nas. (唐訳) 若び出現於天世間、説微妙法、若見此者
……。転訳は「大智慧聚」を直ちに如來と名づける。

29 「法身」は元來「法の聚つ」だ、やれより成るふの、ふる
意味で如來をさすが同時に、「法界」あるふは「法性」の同義
語の如くつかわれる。その「法界」がまた、二義をめぐらしに
へこては後説。

30 [陸] ふじゆ別出。

31 RGV. p. 59. ll. 11~14. 漢訳の「無量煩惱所纏品第六」の
圖頭。

32 推定されるサンスクリット文を、[附]に掲げておいた。

33 大正31, 811b-c.

34 拙稿「如來藏說における信の構造」(駒大紀要 No. 22, 昭
39) 参照。

35 大正31, 811b ふの「相應」は如來藏界が有為法の依持でも
あらかじめわかる。

36 大正31, 796b. 「血性清淨藏」ふは、血性清淨心ふじての如

來藏をいうに他ならぬから、『不増不減經』の説くところに基づいてゐるとは明瞭である。

37 大正3¹、156c. 『大乘阿毘達磨經』偈中の「無始時來の界」の説明。真諦はこの「界」を如來藏と解釈する。これは『仮性論』の前掲の例と同じく、自性清淨心の説明であるが、ここでは「煩惱縛」を重視して、「藏」すなわち覆藏の義としたのである。

38 同上¹ 264b. 以上の「五藏義」に関する諸例の意義については、拙稿「真諦訳・撰大乘論世親釈における如來藏説」(結城教授頌寿記念『仏教思想史論集』昭39、所収) 参照。

39 ヒの「不脱體」(avimirmuktajñāna, amuktajñāna, amuktajñāna) の意味たる用例について、拙稿「AMUKTAJÑĀNAの語義について」(田辺氏、一一、臨33) 参照。(ただし) ヒの分解した形、及び、正確なチクヒト語は Ablative ともかく Instrumental case と訳せらる。たゞ、jñānenavijnāna [yasya sah]; ye-ses dan ma-bral-ba)

40 RGV, p. 12 によむる用。『勝鬘經』大正2¹, 221c 程²。

41 RGV, p. 76 によむる用。『勝鬘經』同上¹。

42 RGV, p. 73 によむる用。『勝鬘經』220b 程³。

43 かなむれ、清淨なる徳性を自性として具備してゐるが、(衆生の) 心を「自性清淨心」と名づけ、かうの意味。

44 『釋月仏教辞典』「法界」の項参照。Edgerton の辞書は第116頁についで言及していない。本質的⁴の dharma⁵ (法性) のこと。語義として因と思ふが、実質

的と區別する。後説参照。

45 Edgerton, BHS Dictionary 'dhātu' の項参照。

46 『佛金經』大正2¹, 5a. Yaśomitra's Vyākhyā (Wogihara's Ed.) p. 45.

47 ただし、「聖法出生の因」も限定する場合が多い。(たゞれば Madhyāntavibhāga, I, 15, Nagao's Ed., 1964, p. 23) 程⁶。それが大乘佛教といへば古い型であら。

これは『不増不減經』の用法にも通ずる。その背後には、「有為法は虛妄」「煩惱は客塵」の理解があら。

48 『不増不減經』には(やへて)『勝鬘經』により、'sarvasattvāstathāgatagarbhā' といへる表現も、それに類似する有財釈的用法もなま。

49 'dhātu' も 'ākara' の訳義とされる如く、「鉢床」(「鉢山」)の意味があつて、譬喻的にも使われるが、仏教では古くからこの抽象的用語といへる。'garbha' といへるのより歴史はなま。

50 RGV, p. 72, 「唯識」十頌安慧訳『撰大乘經』その他に用われぬ。『佛金經』せの「界」を如來藏と解するが、唯識説一般ではアーラヤ識を解する。それが「輪廻の所依」であることを説明するためには、アーラヤ識の方が妥当である。何となれば、如來藏は『不増不減經』の説明をみて、「聖法出生の因」ではある。煩惱とは「不相應」なのであるから。『勝鬘經』は「輪廻の所依」といへんことをよく説明していなま。(拙稿「如來藏思想における勝鬘經の地位」参照) む

心、トーハヤ識せ、dhātu が轉廻の所依でもあることを説明するためには考案されたのではないのか。やひどは、他の諸点同様、唯識説におけるアヒダルマ教説の復活、ないしは大乗的改釈がみられる。

51 やひどにあげた『不増不減經』の「實圓なる法性」も、『如來藏經』の「胎兒となる如來の法性」からの用例参照。如來智もこの「如來の法性」が衆生のうわごとむ存在するか、その同質性の故に衆生 = 如來である。ただし、この因と果の同質性、すなわち、回類因——等流果という關係は、アヒダルマ教にゆけむ「取」の定義じゅくわねじる。註46にあげた『俱舍論』の該句箇所参照。たゞ、dhātu = dharmatā じふいんじだ、dhātu を理法、方取の意に解する世とあるにせよ。(たゞべど、『雜阿含』十一(11九六經) = SN. II, p. 25 に繰起の理法 idapaccayatā, paṭiccasamuppāda 々 dātu じふいん場合)。

52 やひど、「如來の法性」(tathāgata-dhātu = tathāgata-dharmatā)

本論で解説した如く、この節の漢訳は意味の通りにくく箇所が多い。じひどは本論での解釈に従って意訳を試みる。その際、会通のために必要な漢訳、の読み方と、最少限改訂をした方がよいと思われる箇所を一一指摘しておひく。おもより、ひれせあくもド訳であり、先学諸賢の御教示、御批判を仰めたこと略い。
〔1〕種法を示す各命題中みられる「及」は、「与」と回義と考え、原文の作具格を訳したものとみれば、漢訳のおおじ、筆者の解するよつた内容を含意する。やひどは「如來藏、本際相應体、及、煩惱纏不清淨法」(ナラヤンタナラクタ) ②も同様の構文。〔3〕については「如來藏、未來際平等圓、及、有法」(ナラヤンタナラクタ) とじふむむづやか。これがかり半想やれる原サンスクリット文は次の如くなむやあら。

(1) anādisāṃnidhya-sambaddhasvabhāvas tathāgata-dharbhāḥ śubhadharmaḥ/

53 拙稿「如來藏圓相によけむ勝鬘經の地位」參照。たゞ、「如來性」「仏性」の原語じつては別と tathāgata-gotra 'buddha-gotra' があるが、前者は意義は別じて語形は『華嚴經』起唱』 & 『維摩經』と呪出されるなどかねむる。『不增不減經』にも『勝鬘經』によく引かれてる。前面の問題からほんたれのじ、じひどが伽藍をやひく。右の繪文、おもむ「華嚴教學と如來藏思想」参照。

54 宇井伯寿、前掲書、p. 201ff., 346, 588 參照。

[附] 「衆生界三種法」に関する一節の和訳

不相應不思議法界」の句を「依此不相應煩惱所纏不思議法界」と改める。

上段にこの改訂を施した原文を掲げておく。

復次、舍利弗、如 また次に、シャーリップトロよ、わたし

我上説、衆生界中亦 くしが上に説いたと同様、衆生界にも

三種法。皆真実如不 また三つの特質があつて、すべて、真

異不差。何謂三法。 如と無差別である。三つとは何である

一者、如來藏本際相 か。(1)如來藏は清淨法と無始時來共存

應体及清淨法。二者、しつつ、本質的に結合する性質のもの

如來藏本際不相應体 である。(2)如來藏は煩惱の覆藏とい

及煩惱纏不清淨法。 不清淨法と、無始時來共存しているが、

三者、如來藏未來際 本質的に結合しない性質のものであ

る。(3)如來藏は未來永恒にわたつて、 常恒の法性を有する。

舍利弗、當知。如來際本際相應体及清淨法者、此法如實・

不虛妄・不離・不脫

智慧・清淨真如法界

不思議法。無始本際

離れざるところの、清淨なる真如法界

不思議の法である、ということ。無始

體。舍利弗、我依此 本際よりこのかた、如來藏には、この清淨真如法界、為衆清淨にして、本質的に結合する法が存在する。シャーリップトロよ、わたくし生故、說不可思議法は、この清淨法界たることにもとづいて、衆生のために、これを、不思議の法たる自性清淨心と説くのである。

自性清淨心。

舍利弗、當知。如來藏本際不相應体及 煩惱纏不〔清〕淨法 いう不清淨法と、無始時來共存していきである。(2)「如來藏は煩惱の覆藏と者、此本際來・離・脱・不相應煩惱纏不清淨法、唯有如來菩提智之所能斷。舍利弗、我依此不相應煩惱所纏不思議法界、為衆生故説、為客塵煩惱所染、自性清淨心不思議法。」

常恒の法性を有する。 シャーリップトロよ、次の如く知るべきである。(1)「如來藏は清淨法と無始時來共存しつつ、本質的に結合する性質のものである」とは、この如來藏が如實・不虛妄にして、不可分離、智と心不思議法。

如實・不虛妄にして、不可分離、智と心不思議法。

離れざるところの、清淨なる真如法界不思議の法である、ということ。無始

衆生のために、「客塵煩惱によつて汚された自性清淨心なる不思議法」と説くのである。

舍利弗、當知。如來藏未來際平等恒及

具一切法。於世法中不離不脫真實一切法、住持一切法、攝一切法。舍利弗、我依此

根本であり、一切法を備え、一切法を

具し、世法中にありながら、真實・無

すなわち、この如來藏が、一切諸法の

根本である。きである。(3)「如來藏は未來永劫にわ

たつて、常恒なる法性を有する」とは、

とある。その他、引用などられないが、『性論』が利用した句

として、次のものがである。

1

sa punar.....bālānām ekasya dhātor yathābhūtam ajñ-

ānād adarśanāc ca pravartate/ (RGV, p. 13, ll. 11—12)

=一切愚癡凡夫、不如實知彼一界故、不如實見彼一界故、起

(於極惡大邪見心)(大正1六、四六七上)

≈ 1) anādisāṃnidhya-sambaddhasvabhāva- subhadharma-

tā. (RGV, p. 59, 1. 13) → 優來藏本際相應體及清淨法。

2) anādisāṃnidhya-saṃbaddhasvabhāvaklesakośatā (ibid.

p. 59, 1. 12—13) → 優來藏本際不相應體及煩惱纏不清淨法。

3) aparāntasama-dhruvadharma-tā-saṃvidyamānatā (ibid.

p. 59, 1. 11) → 優來藏未來際平等恒及有法。(何れも、大正1

六、四六七中。〔註〕 1' 參照。)

法根本、備一切法、攝一切法、一切諸法の

具一切法。於世法中不離不脫真實一切法、住持一切法、攝一切法。舍利弗、我依此

根本であり、一切法を備え、一切法を

具し、世法中にありながら、真實・無

すなわち、この如來藏が、一切諸法の

根本である。きである。(3)「如來藏は未來永劫にわ

たつて、常恒なる法性を有する」とは、

とある。その他、引用などられないが、『性論』が利用した句

として、次のものがである。

2

不增不減經

RGV

如來智慧境界、亦是如

來心所行處。舍利弗、

如是深義一切聲聞緣覺

kyāḥ samyak svaprajñayā [jñātu-

智慧所不能知、所不能

m vā] draṣṭum vā prat�avēkṣitum

見、不能觀察。何況—

vā / prāg eva bālapṛthagjanair

[附 二] 『不增不減經』サンスクリット断片

以下は、『性論』(略号 RGV) 所引のサンスクリット文を、

不増不減經の如來藏説(高 聲)

切愚癡凡夫而能測量、 anyatra tathāgataśradhāgamana. 唯有諸仏如來智慧、乃 taḥ / 能觀察知見此義。舍利弗、一切聲聞緣覺所有智慧、於此義中唯可仰信、不能如實知見觀察。

(2) 舍利弗、甚深義者即是第一義諦。第一義諦者即是衆生界。衆生界者即是如來藏。如來藏者即是法身。

śraddhāgamaniyo hi, sāriputra, paramārthaḥ / paramārtha iti, sāriputra, sattvadhbātor etad adhivacanam / sattvadhātūr iti, sāriputra, tathāgatagarbhasyaaitad adhivacanam / tathāgatagarbha iti, sāriputra, dharma-

canam / (p. 2, 8-14)

(3) 舍利弗、如我所說法身義者、過於恒沙不離不脫不斷不異不思議仏法如來功德智慧。舍利弗、如世間燈所有明色及觸不離不脫。又如摩尼寶珠所有明色形相不離不脫。舍利弗、如來 tagunah / yad uta, ālakṣṇava-

所說法身之義亦復如是。過於恒沙不離不脫不斷不異不思議仏法如來功德智慧。

rṇatābhīḥ / maṇir vā 'lokavariṇa-saṁsthānaiḥ / evam eva, sāriputra, tathāgatanirdiṣṭodharmakāyo , vinirbhāgadharma 'vinirmukta-jñānaguṇo yad uta gaṅgānadivālīkāvyativṛtais tathāgatadharmaih / (p. 3, 4—5; p. 39. 5—8)

(4) 舍利弗、此法身者是不生不滅法、非過去際、非未來際、離一切故。

舍利弗、非過去際者離生時故、非未來際者離滅時故。

(5) 舍利弗、如來法身常、 nityo 'yam, sāriputra, dharmakā-以不異法故、以不尽法故。舍利弗、如來法身 rmatayā / dhruvo 'yam, sāriputra, rṇatkoṭisamatayā / śivo 'yam, sāriputra, dharma-

dharmakāyo dhruvaśaraṇo 'parā-vyatikrāntais tathāgatadharmaiḥ/ ntakotisamatayā / śivo 'yam, sāriputra, dharmakāyo 'dvayadharma' / yad uta gaṅgānadivālīkā-未來際平等故。舍利弗、如來法身清涼、以不一法故、以無分別法故。舍利弗、如來法身不變、以非滅法故、以非作法

故。

(p. 53, 13—16)

(6) 舍利弗、是此法身、 ayam eva, sāriputra, dharmakā
過於恒沙無邊煩惱所纏、 yo 'paryantakleśakośalokoṭigūḍhah,
從無始世來隨順世間、 samsārasrotasā uhyamāno 'nava-
波浪漂流往來生死、 rāgrasangsāragati-cyutiyupapattiṣu
為衆生。舍利弗、是此 samcaran,satt vadhäetur ity ucycate
法身、厭離世間生死苦 / sa eva, sāriputra, dharmakāyah
惱、棄捨一切諸有欲求 samsārasrotoduhkhanirvinño, vi
行十波羅蜜攝八万四千 raktaḥ sarvakāmaviṣayebhyo, da-
薩。復次、舍利弗、是 dharmaskandhasahasrair badhāya
此法身、離一切世間煩 caryām caran, bodhisattva ity
惱使纏、過一切苦、離 ucycate / sa eva punah, sāriputra,
一切煩惱垢、得淨、得 dharmakāyah sarvakleśakośapari-
清淨、住於彼岸清淨法 muktaḥ, sarvaduhkhātikrāntaḥ,
中、到一切衆生所願之 sarvopaklesamalāpagatāḥ, śuddho,
地、於一切境界中究竟 viśuddhaḥ paramapariśuddhadha-
通達更無勝者、離一切 rmatāyām sthitāḥ, sarvasattvālo-
障、離一切礙、於一切 kanīyām bhūmim ārūḍhāḥ, sar-
法中得自在力、名為如 vasyām jñeyabhūmāv advityām
來應正遍知。

na-dharmāpratihasarvadharma-

īśvaryabalaṭām adhigatas, tathā-
gato 'rhan samyaksambuddha ity

ucycate / (p. 40, 16—p.41, 5)

(7) 是故、舍利弗、不離 tasmāc, chāriputra, nānyāḥ satt-
衆生界有法身。不離法 vadhäetur nānyo dharmakāyah /
身有衆生界。衆生界是 sattvadhäetur eva dharmakāyah /
法身、法身是衆生界。 dharmakāya eva sattvadhätuḥ /

舍利弗、此三種者義 1. advayam etad arthena / vyāñjana-
名異。

(8) (此謂之衆生界の三法之謂也。一歸於空。〔註〕 1. 參照)

mātrabhedah / (p.41, 15—17)

(9) 舍利弗、此三種法、皆真實如不異不差……

諸仏如來之所呵責。

(10) 舍利弗、若有比丘、 nāham teṣām śāstā, na te mama
比丘尼優波塞優婆夷、 śrāvakāḥ / tān ahām, sāriputra,
若起一見、若起二見、 tamasaḥ tamo 'ntaram andhakā-
諸仏如來非彼世尊。如 rāṇ mahāndhakāragāminas tamo-
是等人非我弟子。舍利 bhūyiṣṭā iti vadāmi / (p. 28, 3—
弗此人以起一見因緣故、 4)
從冥入冥、從闇入闇、
我說是等名一闡提。

(以下略)